

わがままな ^まコヒー^と
^{がっこう} ^{ともだち}
学校の友達

5巻：^{しんゆう}親友になるには



文 さくらい ゆうせい
絵 うすい ゆみこ

ここは ^{おや}親とはぐれた ^{ことり}小鳥たちが ^{あつ}集まる ^{ちい}小さな ^{がっこう}学校。
^と飛ぶのが ^{いちばん}一番速い ^{はや}ライライにも ^{なや}悩みがあるようです。

「キーン コーン カーン コーン」

サニーが ^{げんき}元気よく ^なチャイムを ^い鳴らして ^い言いました。

「さあ、^{じげんめ}3時限目の ^{じゅぎょう}授業は～

フウリーが ^{なや}ライライの ^き悩みを ^き聴く ^{ばん}番だよ！」



アカシアの森へ移動した校長先生は

フウリーに言いました。

「フウリーはペンギン島でもリーダーだったし、
みんなより少し年上じゃ！ ライライが言葉に
できない思いを 読み取って 聴いてあげなさい」

『僕に任せてよ！ ライライは頑張り屋さんだから
きっと素晴らしいリーダーになれるよ』

「そうかのう・・・フウリーよ！

例えリーダーの素質があったとしても、
ライライの心の奥深くにある、本当の気持ちを
聴いてやらんといかんぞ」

『分かりました、心の奥深くにある
本当の気持ちですね！』

「フウリーなら できるはずじゃ！」



「ライライ！モモと仲直りしたのに、
何だか元気がないね」

『そうなの・・・私、モモと仲良くなりたいのに
何だか おかしな自分があるのよ』

「仲良くなりたい自分と、おかしな自分が
二人いるの？」

『うん、モモのママが女王様で、子供や仲間を
見捨てるのは許せない！でも・・・
その許せないママに 憧れちゃう自分があるの』

「モモと仲良くなりたい・・・
それなのに モモの嫌いなママに憧れちゃう・・・
モモに悪いと感じているのかな？」

『そう・・・モモと仲良くしたいなら
モモの味方にならないと！』

「なるほど、女王様のママに憧れていると
モモの味方になれないと？」

『だってそうでしょ！
モモが死にそうなのに見捨てたのよ！
私のママなら そんなこと絶対しない』



「ライライのママは ^{こども おも} 子供思いだったのかな？」

『そう・・・子供思いだった・・・けど・・・』

「けど・・・ どうしてだろう？」

^{こども おも} 子供思いの ^{はなし} ママの話をしてるのに
^{ひょうじょう} 表情が ^{くら} 暗く ^み 見えるのは・・・」

するとライライは ^な 泣き ^だ 出してしまいました。

『グスン、グスン・・・ あれ？ どうしてかしら。
^{わたし} 私・・・ ^{なみだ} 涙 ^と が止まらない』

「そっか・・・ ^{ぼく} 僕にも ^{こと} そんな事 ^が あったなあ」

『えっ？ フウリーにも？』

「うん、 ^{ぼく} 僕も ^{わか} 昔ね、 ^{なかま} 仲間を ^{たす} 助けたのに
^{きもち} 気持ち ^{わる} 悪いって ^{きら} 嫌われた事 ^{こと} があったんだよ」

『えっ？ ^{たす} 助けたのに？』

「そうさ！ ^{ぼく} 僕は ^{わけ} 訳あって ^{そだ} ペンギンに ^と 育てられてね！
^{しま} ペンギンの島では ^{ぼく} 僕だけが ^と 飛べて、
^{へん} 変なヤツって ^{おも} 思われちゃったんだ」

『^{たす} 助けた ^{なかま} 仲間 ^い に言われたら、 ^{つら} よけい辛いわね・・・』



ためしよみ

は

ここまでです